

入学式祝辞

服部 英雄

(比較社会文化学府長・研究院長)

みなさん入学進学おめでとうございます。学府長の服部です。今日のおき日に、ひとことお祝いのことばを述べさせていただきます。

みなさんはこの九州大学大学院比較社会文化学府に入学・進学されました。修士の場合には志願者120人、合格し入学した者は53人、2.3倍の難関でした。博士課程の場合は志願者31人、合格者22人で、やはり1.5倍の難関です。

国籍をみると

博士後期課程 (22名)

中国	6名 (国際コース1名を含む)
韓国	1名
スリランカ	1名
米国	1名
日本	13名

修士課程 (53名)

中国	26名
韓国	3名
中国 (台湾)	1名
ベトナム	1名
ブラジル	1名
日本	21名

です。

こうした国際性は比文の特色です。それでこの挨拶文は日本語の聞き取りがまだまだむずかしく思われる方のために、プリントも配布しています。

さてこれからみなさんは、短い人で2年間、後期課程をめざす場合はさらに3年間ないしはそれ以上をこの学舎^{まなびや}にて過ごされることとなります。

この比較社会文化学府は略称を比文といいます。学府に所属する教員は現在78名、7月以降には79名となり、ほかに非常勤講師の先生が9人で合計88名です。わたしたち教員スタッフはみなさん方の学ぶ意欲に対し、最大限の努力と援助をします。また関係する事務部の多数の職員もあなたがたを支援します。

さて九大は昨年100周年を、迎えましたが、比文そのものは18年前の1994 (平成6) 年に九州大学に作られた学府で、新しい教育組織です。3年前までは市内中央区六本松にありました。前身には古い歴史もあります。先ほどコールアカデミーがうたってくれた歌は最初が「松原に」という、九州大学の学生歌です。「松原」、「防塁」という言葉にあるように、松原の中にあって元寇防塁が存在する箱崎地区の歌です。この箱崎キャンパスは、数年後にはわたしたちがいるイトキャンパスのイーストゾーンに移転してきます。そしていまはセンターゾーンにいる比文も、その同じイーストゾーンに再移転する予定です。

2番目の歌は「纏^{まと}うに淡き」といい、六本松地区にあった旧制の国立であった福岡高等学校の学生が愛唱した寮歌^{しやうか} (逍遙歌) です。旧制福岡高校の教員は戦後すぐに行われた改組によって、多くが九州大学教養部の職員となり、18年前の改組で比文ができたときに、教養部の多くの教員が比文の大学院教員となりました。比文の流れのルーツともいえる六本松の歌として歌ってもらいました。

3番目の歌が「愛^{いと}し伊^{いと}都の国」で、これはこの新キャンパスを歌った歌です。九大教授であった、と同時にフォークソング歌手であったことでも著名な北山修氏がこのキャンパスにある嚶鳴天空広場のイメージソングとして作詞しました。

3つの歌は比文の歴史を示す歌であると考えます。比文は新しい組織ですが、組織の変遷を考えると、前身には古い歴史があったといえます。

さてみなさんは学問を志されています。学問は崇高なものです。なぜなら学問がめざす真理、新事実の発見は何にも勝る価値を持つからです。真理は何にも負けないものです。少なくともそのはずでした。しかし現実にはつねに学問が力を持ち得るわけではありません。

わたしは1週間前、3月末に、はじめて東北大震災の被災地を訪れました。福島県いわき市です。駅前のホテルは復興工事の人が借り切っており満室です。わたしの宿は海岸沿いの薄磯^{うすいそ}という地区にある民宿でした。この薄磯地区

はまさしく被災地でした。流失家屋は全戸数250戸のうち233戸、残った家屋はわずかに17戸、9割以上が流失です。死者は116名、行方不明者11名、あわせて127名が犠牲になっています。しかしあまり報道はされていません。

荒廃してしまった町のあとしかありません。廃墟のなかにやや高い位置にあったその民宿は奇跡的に残っていて、やはり復興に当たる工事の人たちが宿泊していました。民宿の前にあった中学校の体育館の損傷もひどいものでした。高台にあった小学校はこの中学校の生徒もあわせて4月から現地にて子どもたちを受け入れるべく、除染作業の最終段階でした。

被災されたいくにんかの方のお話を聞きながら、なぜあの場合には死ななければならず、またなぜ生き残ることができたのか。そのことをつくづく、考えました。地震から津波第一波までは40分です。津波は3波まできて2波、2番目のものが一番大きかったそうです。

地震で電気は寸断されテレビを見ることはできません。当初携帯ラジオは1メートルの津波がくるといふ誤報を伝えていたそうです。比較的正確な情報を伝える地元のFMいわきを聞いた人は車に乗っていた人だけでした。みなが集まっていた広場に、たまたま海をよく知る人がいて、海底まで見える異常な引き潮に必ず津波が来るから逃げろと説き、それで逃げた人、海を見てふだん青い沖合水平線が真っ茶色になっていたから逃げたという人もいます。安全な場所まで逃げた人は助かりました。逃げたにも関わらず戻った人もいます。30分たってもこないからといって戻った人、第1波のあと戻って第2波に呑まれた人。さまざまです。逃げようとしなかった人はみな亡くなりました。防波堤で海を見ていた区の役員たち。また家の中にいた人は全員が死亡しました。高齢者もいたでしょうが、ふつうに地震の片付けに夢中だった人もいたでしょう。津波は水ではありません。泥です。溺死、おぼれ死んだ人は一人もおらず、全員が即死だったといえます。

多くの人は親からここには津波は来ないといわれていたといえます。

偶然もあります。高齢者の問題もあります。しかし大きかったのは思い込みです。亡くなられた方には申し訳なく思うし、偶然だったといたいけれど、津波が来るはずはないという根拠のない思い込みがなかったならば、多数の人は助かったと思います。

津波は地球上で、世界各地では頻繁に起きていて、多大な被害をもたらしています。遭遇した人にとっては初め

てのことだったとはいえ、なぜ人類の経験知は生かされなかったのでしょうか。

思い込みはどの世界にもあります。合理的なはずの学問といえども、人間が行うものです。思い込みはあります。わたし自身も思い込みにはまっていたことに気づくことがあります。研究者たち総体が思い込んでしまっていることさえあります。しかし学問の進歩につれて誤りは正されなければならないのです。

以下はわたしがよく話すことで、一部の方には以前にもお話したかと思いますが、新入生のみなさんにもお話しておきたい。

宮城県女川^{おながわ}原子力発電所は1968年に建設が開始されましたが、標高14.8メートルに立地しています。いっぽう東京電力の福島第一原発はその一年前、1967年に建設されています。標高35メートルもあった台地を標高10メートルにまで掘り下げています。高さは女川原発の3分の2しか確保していません。

女川原発では貞観地震・大津波のデータが強く意識されたといわれています。平安時代の貞観11年、西暦869年の大津波です。1200年前のデータです。

女川原発を襲った津波は13メートルとも14.8メートルともいわれています。標高14.8メートルという高さがあった辛うじて、女川原発は破壊されたり爆発することはなかったのです。たったの10メートルの高さしかなかった福島第一原発についてはみなさんご存じの通りです。周辺の多くの町や村はその長い歴史を閉じざるを得なくなってしまいました。まさしく未曾有の事態です。

過去の経験知、地震学や歴史学の知識が生かされた場合と生かされなかった場合があったことになります。同じく国の施策として、ほとんど同時並行的に建設されていったにもかかわらず、2ヶ所の原発にて、このような顕著な差異が生じたのはなぜなのか。未知の分野、人間のコントロールが難しい危険な分野に挑むことへの恐れ、畏怖を感じるできない人々たち。われわれはそうした人たち、思い込みにはまっていた人たちに将来を委ねてしまったのです。

知識・学問を尊重する心こそが、日本の国土の保全と生命の安全、多数の人々の幸せをもたらす、学問を無視する試みが国民の不幸に直結します。思い込みは自らの手で打ち破らねばなりません。

わたしたちの学問は強くあらねばならないが、おのずから強くなれるわけではない。学問をより強いものにしてい

くために、わたしたちはあなたたちとともに学問の基盤を見つめ直します。

わたしは自分が日頃好むことばをみなさんにもお伝えたいと思います。それは

田舎の鈍才たれ
ということばです。

これは経済学者の宇野弘蔵がいったことばです。宇野は1897年から1977年までを生きた人物で、半世紀前の人です。学問をする人間のタイプを都会、田舎の二区分、秀才、鈍才の二区分で4区分にわけて比喩しました。かれにいわせれば、学問をするうえで向いていないのは田舎の秀才と都会の鈍才である。何とか使えるのは都会の秀才、一番よいのは田舎の鈍才である、そう彼はいいました。わたしはこのことばにとっても共感するものです。

なぜ田舎の鈍才が学問に向いているのでしょうか。

田舎の秀才と都会の鈍才がだめであるという感覚は何となく共有できます。では都会の秀才よりも田舎の鈍才のほうがよいということは何を意味しているのか。田舎の鈍才は真に理解するまで、他人のことばを信用しないからではないかと思います。自分が本当に納得したことから出発するのが、田舎の鈍才なのでしょう。都会の秀才の場合は、未消化でも他人のことばや論理に飛びつくのではないのでしょうか。

じつは同じような発言はいくつかあります。今やとても有名になったのは、アップル社を協同創業したスティーブ・ジョブズ氏が好んだ「ハングリーであれ、愚かであれ」です。

Stay hungry, Stay foolish

どん欲であれ、愚直であれ。

ジョブズ氏は昨年亡くなりましたが、一人で何人分もの発見をし、何人分ものしごとをした人です。実業界の成功者ですが、その人生は山あり谷あり、じゅんぷうまんぼん順風満帆ではありませんでした。

ハングリーはわかります。あくなき探求心です。途中で

満足してはいては進歩はあり得ません。ではなぜ愚かでないといけないのか。

かれはこうもいっています。ほかの誰かが考えた結果に、じぶんが従って生きる必要などはない。最も重要なことは自分自身の心と直感である。じぶんに素直に従うこと、勇気を持って行動することだと。

ここに田舎の鈍才との共通があります。学問の社会だけでなく、実社会にも通ずるものがあるのです。

愚かではない人間は、利口であり続けなければなりません。他人のいうことはすぐに理解できるでしょう。ほかからは優秀な人物と見てもらえるでしょう。しかしそれはもしかしたら自分の心と直感を二の次にしていることかもしれないのです。

どこにも思い込みはあるけれど、学問の世界では誤った思い込みは必ず打破されねばなりません。田舎の鈍才こそは思い込むことなく、自身で判断していけるでしょう。王様は裸だといえるのです。

あなたたちが勉強を進めていけば、どこかの地点で先学の論に不自然さを感じることはあるはずですが、おそらく研究はそこから始まります。その発見には愚直であることが必要です。

あなたが打破すべき通説は多数派であり、容易にはあなたの説を受け入れません。利口な人間は孤立しないでしょう。愚直な人間は孤立します。しかしその孤立は貴重なものです。孤立を恐れる必要はありません。通説は学者共同の思い込みかもしれないのです。時代はあなたたちのものです。

学問は崇高なものです。それが多数の人々の幸せに結びつくためには、力を持つことが必要です。わたしはあなたたちの未来に期待します。

これがみなさんの出発に際しての、わたしからのささやかなあいさつです。がんばれば比文生。ともに研究に邁進しましょう。